

## 「我等なぜキリスト教徒となりし乎」

安岡章太郎（やすおか しょうたろう）

井上 洋治（いのうえ ようじ）

遠藤周作と学び、教えられたこと

光文社 1999 . 1/30 発行

安岡章太郎の洗礼名「トマス」（井上洋治神父司式） 遠藤周作が代父

井上洋治神父司式の河上徹太郎さんのお葬式「何だ、あの説教は。あれは日本語になってないじゃないか」と安岡章太郎は八つ当たり、キリスト教に批判的だった。クリスチャンをからかい続けた安岡章太郎が受洗。何事も人の縁？

太郎も死んだ。お婆も、もう生きてはいない。自分も、すぐに死ぬだろう。死ぬ。死ぬとは、何だ。何にしても、自分は死にたくない。が、死ぬ。虫のように、何の造作もなく死んでしまう。――こんな取り留めのない考えが、暗の中に鳴いている藪蚊のように、四方八方から、意地悪く心を刺して来る。 芥川龍之介「偷盗(ちゅうとう)」の中より

親鸞の「悪人正機説」 「善人なおもて往生を遂ぐ、いわんや悪人をや」  
法然からでた言葉？

法然「法然上人絵伝」より

遊女の問い「私たちのような罪深い者でも救いをうることはできるのでしょうか」  
法然「もし今の仕事をやめて他の仕事で生活していけるのなら、そうするがよい。でも他によい仕事も見つからず、身体をなげうってまでも仏に従うという気がまだ起らないなら、今のままでよい。ただ念仏を唱えなさい。阿弥陀如来様は、そのような罪人のためにこそ誓願を立てられたのです。深くこの弥陀の心を信頼し、決して絶望したり自己嫌悪に陥ったりしてはいけません。本願に信頼して念仏すれば、往生出来ることは間違いない」

法然にもイエスにも共通しているのは、自分は正しいと思っている人間はとかく自我の強さのために、人の欠点や弱さを裁き、拳げ句の果てには「天に代わって人を裁く」姿勢になりやすく信仰心も薄くなりがちである。それに較べて悪人は、罪人と呼ばれる人たちはには、むしろ自分の弱さを嘆く懺悔の心が起こりやすく、人の悲しみや弱さをも受け入れやすいところがある。そういう認識がイエスにも法然にもあったと思います。

医者が必要とするのは、丈夫な人ではなく病人である。わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くためである。」(マルコ 2:17)

井上 洋治

「私の考える「復活」は、私が死んでも私は安岡章太郎さんと出会える、その出会える場が、「からだ」という言葉で表現されているのだと私は思っている。愛と認識の場として象徴的に「からだ」と、言っているのだと思います。」

「復活とは、神の懷に蘇ることだから、そういう切り口で考えるならば、神様の記憶に残っているという方が、確かなのかも知れない。神様の記憶に残っているということは、神様は今も私たちを生かしている訳ですから、神様の中にあるそれが、今も私の中に働いている。過去に生きた人の証しが神様の記憶の中にあり、そして私の生きた証しも神様の中に残ると言うことだと思えます。」

井上 洋治

「今、私たちは生きている訳ですが、本当は自分が生きていると言うよりも、もっと大きなものに生かされている、それが仏教にもキリスト教にも、すべての宗教に共通した宗教感覚だと思います。

生かされている自分というものが見えるか見えないか、それが宗教を持っているか持っていないか、あるいは偽物の宗教に入っているのか、そうでないのか、そういうことを見分ける基本的なことだと思います。」

インドの説話

「不可能なことはないと威張っていた仙人が、生きた虎をつくれるのか、と言われて、たやすいことだと虎をつくったところ、その虎に仙人もそこにいた人たちも全員食われてしまった」という話がある。

神の座について「何でも出来る」と調子に乗っていると、できたものに食べられてしまう。

内村鑑三は少年時代に洗礼を受け、もうあっちの鳥居、お社、地蔵さん、お寺などなどで一つ一つに頭を下げてお参りしなくてもいいんだ、イエス様だけでいいのだから、これはいいやと無邪気に喜んだ。 神が一つというのは、そういうことでもある。

仏教で言う「輪廻転生」という言葉は、本来はあまりいい言葉ではない。

三界六道（さんがいくどう・苦しみ多いこの世）に魂が戻って来て迷っていると言うことだから。

仏教では六道（地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上の六つの迷界）を輪廻している間は浄土に行けないと教えている。その輪廻を断ち切ってはじめて浄土宗ならば「南無阿弥陀仏」と言うことで浄土に行ける。すなわち、輪廻転生を断ち切るのが仏教本来の教えである。いい加減なことをしていると、死後も浄土に行けないで、輪廻してしまうという訳である。

遠藤周作「俺は踏み石になりたい。捨て石になりたくない。」